

H30年3月23日(金)

愛知県看護協会

摂食・嚥下障害看護認定看護師教育課程の
H29年度 修了式が行われました。



H29年9月に始まった摂食・嚥下障害看護認定看護師教育課程
全国各地から集まった13期生32名は、7カ月間の講義や演習・実習を経て
修了式を迎えることができました。

4月からは、新しく得た知識と技術をもって、所属施設の皆さんと共に頑張ります！

半年前、新たな学びへの期待と慣れない環境への不安を胸に抱き研修が始まりました。摂食嚥下障害に関する講義では、専門的知識を学び食行動の奥深さを感じ、一段と興味が沸きました。認定看護師の先輩方からの講義では、詳細な活動状況を教わり知識や技術だけでなく、人間性を高めることが大切であることを学びました。グループワークでは、病態や看護について意見を出し合い理解を深めました。限られた時間の中で課題を完成させるために個々の力量を最大限発揮し、協働することの大切さを学びました。試験や課題に追われる日々が続き肩を落とすこともありましたが、お互いに支え励まし合い一つ一つ乗り越えてきました。課題が終わると息抜きをし、大いに笑って過ごした日々は忘れられない貴重な時間です。

臨地実習では、患者様にとって「食べる」ことが大きな楽しみであり、活力になることをあらためて実感する機会となりました。様々な疾患をもつ患者様と向き合いながら、これまで学んできた知識や技術を駆使してあらゆる方向から援助を行い、食べられるようになったときの喜びは忘れられません。その一方で、食べることが叶わない患者様との関わりでは、どうすればQOL向上へ繋がるのか日々悩みました。そして、食べられなくても患者様や家族に寄り添い、食べる可能性を探求する姿勢をもち続けることの大切さを実感しました。

この半年間は、初心に戻り自身の看護観を深めるとともに、認定看護師としての責任や、患者様や家族の食べたい気持ちに寄り添い支えていくための決意を新たにすることができました。

高齢化が急速に進む現在、加齢による摂食嚥下障害患者は増加しています。今後の摂食嚥下リハビリテーションでは、機能改善や予防の視点だけでなく、「楽しみ」として最期まで食べ続けるための援助が必要となります。医療現場では入院期間の短縮により病院での治療完結型から、地域全体で支える地域完結型へと変化しています。私たちは、その変化の中で認定看護師に求められる役割を理解し、責務を果たすために努力を続けていく必要があります。これから先、幾多の困難に直面しても、教育課程での経験と、苦楽を共にした32名の個性豊かな仲間が支えになると信じています。これからも共に刺激し合い、摂食・嚥下障害看護認定看護師として医療・社会に貢献できるよう努力していきます。



中島 知恵子

公益社団法人京都保健会
京都民医連中央病院





水野 志穂

名古屋記念病院

私の勤める病院には、摂食・嚥下障害看護認定看護師として活動する先輩がいます。患者様やご家族の「食べたい」「食べさせてあげたい」という想いに寄り添う姿や、スタッフの悩みを親身になり一緒に考える姿に憧れを持ちました。先輩の姿を見て摂食嚥下を学ぶうちに、より専門的な知識や技術を身につけたいと思うようになり、摂食・嚥下障害看護認定看護師になる道を選びました。

決意を胸に研修がスタートしましたが、いざ始まってみるとレポートや試験など、次々に提示される課題に押しつぶされそうになり、投げ出したくなることもありましたが、しかし、そんな時には全国から集まった同じ志を持つ13期生の仲間と励まし合いながら乗り越えてきました。それぞれに異なる経験を積んだ32名の仲間が、6か月半という時間を共に過ごしたことは、摂食嚥下障害看護を学ぶだけでなく、今までの看護を振り返る良い機会にもなりました。

講義では、摂食嚥下リハビリテーション分野の最前線で活躍するたくさんの講師陣にご指導を頂き、広く深く知識や技術を得ることが出来ました。臨地実習では、摂食嚥下障害を抱える患者様への看護実践を行いながら、自分に出来ることは何かを常に考え取り組みました。また、実習施設で指導して頂いた摂食・嚥下障害看護認定看護師の先輩からは、実際の活動を通して、摂食嚥下障害に関する知識や技術をスタッフへ伝えていくために必要な視点や、多職種連携において認定看護師としてあるべき姿を学び、それと同時に難しさも痛感しました。

超高齢社会となった現代の医療現場では、リハビリテーションによって摂食嚥下機能が回復し、食べられるようになる患者様ばかりでなく、徐々に機能が低下し、本人の「食べたい」という思いとは裏腹に、食べることが叶わない患者様との関わりが増加していきます。そのような場合でも、摂食・嚥下障害看護認定看護師として何が出来るのかを考え、その人の食べたい気持ちに寄り添い、自己決定を支援できるよう最善を尽くしていきたいと思えます。